

カルカッタ」の一篇であらう。ここにあつても著者の烈々の氣概は讀む者の胸を揺り動かさずにはをかぬのである。

著者はその序文の最初に、「内容は單なる物語や地誌ではない。

私は之を思想の戦ひの一つとして書いた。」と述べてゐるが、此の戦ひの意識こそは、眞劍勝負の心境であり、それが讀者の心を深く感動せしめる所以であらう。更にその感動を強めるのは著者が此の原稿の執筆直前に陸軍司政官に選ばれ、自ら眞の姿を探索しつゝあつた土地へ赴いた事である。「緊張の中にも心中自ら樂しみの湧き上るのを禁ずることが出来ない」とは、小牧實繁教授の指導のもとに、實踐的性格を有する地理學を學び、更に「この實踐を主張者自らの行動にまで及ぼすべきものと考へて」みた著者の偽らざる歡喜の聲であつたであらう。事實個人的に著者を知るものはその決死の覺悟の中に倫骨を漲らせてみた出發を思ひ起すのである。その後、運輸の都合でマライ半島の一角に釘付けにされた著者が一時も早く現地に到着し度き一念から、陸路峻険を分けて日本人最初の(但し軍人以外では)徒步入籍者となつた事を風の便りに耳にするに及んで、著者の健在を喜び、本書の出版を待たずして勇躍出發した著者を偲び度い。

此のやうな背景を持つ本書は決してしかつめらしい著述ではない。より多くの人々に愛讀さるべき魂の書であるときへ言へやう。讀者は本書を通じてビルマ、印度洋、印度に對する確實な認識の基底を得るであらうが、更にたまたまそれ等の地域を研究の對象とし、その土地を通じて著者の到達した、誠の精神を味ふべ

きであらう。

正に之は袴を脱いだ地政學の書である。打ち寛いだ印緬研究の書である。それでゐてそれは巧まざる名優の演技と同じく、あらゆる資料を馳驅した深奥の研究より出でながら、少しもそれを誇示しようと思はず、逆に出来るだけ慎まやかにその努力を内に秘めんとする傾向さへある。だが全體を通じて見逃してはならぬ大きな含みは印度洋作戦と相呼應するラングーンよりカルカッタへの進撃を暗示してゐるといふ事であらう。そのやうな含みが確に本書の構成の根柢を爲してゐるやうに感ぜられるのである。

僅れの現地で今度は資料を通じてではなく現貨を通して、益々その研究を深めつゝある著者の健康を遙かに研り、直接にその結論が實踐に移されるだけでなく、發表の可能な範圍内のみであつても後進に役立たしめる意味に於いて、更に新に筆を起されん事を望み度い。(昭和十八年六月、目黒書店、B6版、一二五頁、定價壹圓)(村上次男)

日本原始織維工藝史

杉山壽榮 男著

日本の石器時代を研究する人々の間で、著者杉山氏は、工藝的見地から多年考察を進められてゐる特殊な學徒である。曩にものせられた『日本原始工藝』、『原始文探集』及び故喜田貞吉博士と共に編の『日本石器時代植物性遺物圖録』等は、其の點で石器時代文化の闡明に他と違つた審典をなしたものであつたが、今回、更に多年の研究を取纏め、多數の圖版を加へて本書の刊行を見たこと

は、學界にとつて幸慶と謂ふべきである。

本書は、原始篇と土俗篇の二冊よりなり、其の前冊では、主として縄文土器の施文から看取される纖維工藝を論じ、後冊では、現代日本の民藝品や日本周邊の未開民族の土俗品に就いて、其等に見る編物、織物を通じて、日本石器時代の纖維工藝を説明する傍證としよつとしてゐる。即ち前者では、日本石器時代土器（縄文土器）の地方相を述べた後、複雑極らない縄文の施文法を詳細に考査し、兼ねて貝文、櫛目文、押型文にまで論及してをり、また我が石器時代の特殊遺物たる陸泉是川泥炭遺跡出土の有機質遺物の一般的性質と其の化學的分析の結果を叙述し、なほ石器時代の工具に關しても、工藝的見地より示唆に富んだ記述を試みてゐる。後者では、アイヌを中心として北方及び南方の未開民族の土俗品及び日本の民藝品に於ける編物、織物の纖維組織を吟味した後、服装、被り物、履物類に現れた纖維工藝と其の材料に關する委細な記載を以つてしてゐる。

本書によつて從來閑却されてゐた著者の所謂日本石器時代の『軟質文化』なるものは、其の内容に明確の度を加へられ、また錯綜せる縄文の構成及び施文法に對する杉山氏の解釋が明にせられた。そして此れを通じて著者が、當代人の衣服は、獸皮や樹皮をそのまゝ、纏つた原始的なものでなく、裝飾的に高度に發達してゐる編物類から考へても、織物として相當進歩してゐたとする推論を下されてゐるのは、注目すべきである。

たゞ本書を通讀して感ぜられるのは、原始篇と土俗篇が一個の

『原始工藝史』としてなほ統一を缺くの憾みのあることである。土俗篇を以つて、原始篇の内容を傍證し、補填せんとする著者の意圖は、本書に於いて實際の上ではなほ別個の著作の如き觀を免れてゐない。更に本書が『工藝史』である以上、ひとり縄文土器の地方相ばかりでなく、時代相に關する考慮も望ましかつた。現今に於ける我が遠古の文化の研究には、其の方法や態度に就いて、多くの議すべき箇處のあることは、事實であるが、著者の前著『日本原始工藝』の公刊後十數年間に於ける進歩は、何人も否み得ない所であつて見れば、右の新知見を盛つて所謂『日本原始纖維工藝』を歴史的に把握されたならばとの蜀望の感なきを得ないのである。併し、多年此の方面の調査・考察に企し、其の分野にかうした業績を示されて行く著者の精進が、學界の進運に資するものゝあることは、言を俟たないのである。

（規格外、舊四六倍版、二冊。本文、三二四頁、圖版、一九九葉。雄山閣、發行。定價、貳拾圓。）角田文衛

遠 賀 川

——筑前立屋敷遺跡調査報告—— 杉原 莊 介著

遠賀川なる名は彌生式土器の古式のものに對する名稱として、其文化研究者に親しいものであり、此大陸に近かい炭鑛地帯たる遠賀川流域の低地帯は、畿内のそれと並んで日本に於ける彌生式文化育成地域の一をなしてゐる。所がかゝる重要地域なるにも不拘、從來本流域の遺跡としては上流飯塚市の立岩或は此書の主體